

ーにて肝S7に径7mmの高エコー結節認められたが、MRIにて造影効果認められず経過観察されていた。H13年5月、結節は径12mmに増大し、一部に低エコーの領域が出現した。H13年11月、結節は径19mmまで増大し、CTにて早期濃染も認められるようになった。ドップラーエコー、CTHA、CTAP等施行され、結節の一部に動脈血流低下巣を内包した非典型的な結節内結節型肝細胞癌と診断された。経皮的ラジオ波焼灼術(RFA)を施行され、画像上、腫瘍の完全壊死が得られた。腫瘍の高エコー部より施行された腫瘍生検では、脂肪化を伴った高分化進行肝細胞癌と診断された。

結節の一部に動脈血流低下巣を内包した非典型的な結節内結節型肝細胞癌の増殖過程を経時的に画像で観察し得た興味深い一例であり報告する。

#### 10 アザチオプリン内服療法により経過観察されていた自己免疫性肝炎に肝外発育型肝細胞癌を発症した一例

佐藤 俊大・矢野 雅彦・鈴木 健司  
大越 章吾・野本 実・竹内 学  
佐々木俊哉・玄田 拓哉・成澤林太郎  
市田 隆文・青柳 豊・朝倉 均  
石原 清\*・横山 直行\*\*・池田 義之\*\*  
山崎 俊幸\*\*・黒崎 功\*\*

新潟大学第三内科  
同 保健学科\*  
同 第一外科\*\*

症例は70歳女性。1983年に自己免疫性肝炎と診断され、アザチオプリンにより経過観察されていた。昨年5月内視鏡にて胃穹窿部に隆起性病変が認められ、9.25当科入院。超音波内視鏡で粘膜下腫瘍を、CT、MRIでは肝S2からの肝細胞癌が疑われた。腹部血管造影にて肝細胞癌と診断され、部分的切除術が行われた。腫瘍部は単結節型高分化型肝細胞癌、非腫瘍部は自己免疫性肝炎の所見であった。組織中ウイルス遺伝子解析を行ったが、遺伝子は検出されなかった。本例は発癌機序において、興味深い一例であったので報告する。

#### 11 著明リンパ節転移をきたした肝細胞癌の2剖検例

田尻 和人・西川 潤・丹羽 恵子  
藤原 敬人・内藤 彰・山崎 国男  
酒井 剛\*・関谷 政雄\*

新潟県立中央病院内科  
同 病理\*

今回、我々は著明なリンパ節転移をきたした肝細胞癌の2剖検例を経験した。

症例1は78歳男性、慢性C型肝炎、肝硬変で経過観察中の患者で、腫瘍マーカーは陰性であったが、画像所見ではCT、Angio上は肝細胞癌に矛盾しない所見であり、また、縦隔から肝門部、大動脈周囲にいたる広範なリンパ節の腫脹を認めた。しかし、腫瘍マーカーの上昇がなく、肝細胞癌のリンパ節転移との確定診断に到らず、悪性リンパ腫などとの鑑別が問題となった。開腹生検の予定としたが家族の意向で実施されず、診断的治療として全身化学療法が行われたが無効であり、全身状態は徐々に悪化した。その後PIVKAの上昇を認め、肝癌のリンパ節転移が疑われた時にはすでに肝不全は不可逆的であり永眠された。

症例2はC型肝炎患者で肝腫瘍の出現あり、腫瘍マーカー、画像所見上も肝細胞癌に矛盾しない所見であったが、TAE治療の甲斐なく、びまん性の増殖、多発性肺転移の出現を認め永眠された。2症例とも家族の同意が得られ病理解剖が行われたが、2例とも低分化の肝細胞癌で、縦隔を含めた多発性のリンパ節転移を伴っていた。肝細胞癌のリンパ節転移は剖検時には約3割に認められるが生存時の診断例は比較的まれであり、特に縦隔リンパ節転移は剖検例でもまれであるとされている。縦隔リンパ節へは肝表在リンパ節を介した経路も報告されており、縦隔リンパ節転移を契機に発見された細小肝癌の報告例もある。

肝細胞癌のリンパ節転移は比較的まれであるが、低分化癌症例が多く、肝癌の経過観察においては縦隔リンパ節を含めた経過観察が重要であり、また肝癌のハイリスク症例においてはリンパ節腫脹を認めた際に肝癌のリンパ節転移も念頭においた診療も必要であると考えられた。